

天草更紗の検証

2010.9

大和田 靖子

— 天草の更紗 —



端物切本帳（長崎歴史文化博物館蔵）

天草更紗の検証

1. はじめに

“天草更紗”この如何にも異国情感溢れる言の葉を筆者が初めて耳にしたのは何時の頃であったであろうか？

「天草更紗」をテーマとした論証は数多く見聞してきた。そして種々の資料なるものが現在、県・市の諸機関に残されている。昭和8年9月8日九州新聞（現 熊本日日新聞）紙上に田島蕃樹氏 熊本県地方商工技師による“異国情緒ある アマクサ更紗 是非復興せしめ度い”との発表がある。昭和48年「染織と生活 特集 さらさのすべて」（染織と生活社）の中に鈴田照次氏の「鍋島更紗」、牛島盛光氏の「天草更紗」が掲載されている。何れも天草更紗なるものが江戸期島内の旧家に現存との表現で終わり、その更紗裂自体が究明されることがなかった。江戸期天草更紗復興者として中村初義氏（明治18年～昭和45年）が県無形文化財保持者に指定され（昭和50年指定解除）昭和50年代前後には、新聞・雑誌等マスコミに大きく採り上げられ、折しも民芸ブームと相俟って“天草更紗”の名は一気に広がっていったのであろう。そして島内の数寄者により更紗蒐集が盛んに行われた様だ。

時同じくして佐賀県鹿島在住の日本工芸会の重鎮で染色家鈴田照次氏は鍋島更紗を復元、その技法でもってご自身の作品発表を始められた過程で、天草更紗なるものに深く関心を寄せられたのも当然のことであったであろう。丁度、牛島氏の更紗論と相対する立場で天草島内の更紗を丹念に調査、研究中の天草郷土史家平田正範氏との出会いがあった。氏のご協力で昭和51年・52年と2度の鈴田氏の天草の更紗調査に若輩者の筆者も参加することが出来た。江戸期残存と伝えられている更紗裂は殆んど目にすることが出来たものの、実技上の資料となるもの、更紗用の型紙類は見出すことが出来ず結局、決定的な結論を出すに至らなかった。昭和56年に鈴田氏、平成9年に平田氏が亡くなられ、そして平田氏のご遺族より氏の天草更紗に関する全ての資料が筆者に託された。研究者ではなく染の実技者の筆者が心ならずも解明の責を負うことになってしまったと云う事であろう。しかし確たる資料が乏しく“遅々として研究は進まず、その暗中摸索のなかで“天草更紗ありき”という規定概念を転換することにより後述の「端物切本帳」の存在を知ることになる。現在、全国の博物館・大学等に分散されている見本帳の中から天草の残存更紗裂と同一のものを探し出すという作業は大変なことであったが、この照合によって「天草更紗」と伝えられてきたものの実体が大方解明出来たものと確信している。結果として本当に長い年月を要することになってしまったが、通説とは全く異なる結論に達した事をご報告したい。

2. 和更紗誕生の背景

日本では室町時代から桃山時代にかけて、ヨーロッパからポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスが相次いで来航し、その対外貿易によってもたらされた外来染織品は江戸時代の染色の発展に極めて意義あるものであった。そして江戸幕府の鎖国政策が進められていく中で1636年に長崎に出島が築かれ、それまで独占的な貿易体制をとっていたポルトガル船来航禁止となり、出島は唐船と紅毛船の唯一の開港場となった。多種多様の中国文化と南蛮文化の伝来の中で輸入される異国情緒豊かな渡来更紗は日本人のこころを強く捉えたであろうことは想像に難くない。初期の更紗の渡来には不明な点が多いが、近世初期に於いて外来更紗は富と権力の象徴であり特権階級・富裕層の手に渡り、一般庶民には手の届かない羨望の品であったに違いない。しかし、渡来の初めは珍貴であった更紗は種々の要因の基、徐々に社会に浸透し文政期頃になると一般大衆向けの廉価な「和更紗」と称される渡りものの更紗を模した模造更紗が日本国内で製作されるようになったと云われている。17世

紀以降の江戸期は日本では輸入に頼らずに綿の栽培、綿織物生産は本格化しだし、それに既に中世から近世にかけて確立されたといわれる糊防染で行う型染の技法が成立していた。本邦製の更紗は、この型紙の型を使用して糊を使わず染料を直接型紙に摺り込む「型摺り」の技法を用いた。型紙は当時、紀州藩の強力な保護の元、独占的な販売網を所有して全国に流通していた伊勢型紙を用い、幕末には型紙の普及に伴い和更紗は全国各地の紺屋に広がっていたものと思われる。其中で独自の更紗染として京・堺更紗、鍋島更紗、長崎の更紗、天草更紗の名がよく取り上げられる。

「さらさ」について

“さらさ”とは一体如何なるものであろうか。その発祥地・語源については様々な説明がなされている。語源についてはポルトガル語に sarassa, saraçs、スペイン語に saraza がありいずれもインド綿布を指す。ジャワ語に srash があり、西インドの地名から surato、インドのグジャラートの土語 sarasa から等の説があるが何れも確証がない。

起源をインドとした“さらさ”の定義は非常に曖昧ではあるが小笠原小枝氏の論考の抜粋によると木綿布に染色された神秘的・幻想的なものを感じさせるエキゾチックな模様・色彩の鮮やかさ・染色の堅牢さ・洗濯にも耐える“インドさらさ”は十六世紀末オランダ人によりヨーロッパに紹介されヨーロッパ各地で爆発的人気を呼び、キャラコブームが沸き起こった。イギリス（一六〇〇年）、オランダ（一六〇二年）に各々東インド会社が設立され輸出量も増していった。一八世紀中葉頭“インドさらさ”の模倣から出発した“ヨーロッパさらさ”は産業革命の洗練を受け大きく飛躍し、合成染料と銅版プリント・ローラープリントという近代の武器で質・量ともに“インドさらさ”を凌駕し、その波が日本に押し寄せてくることになった。

日本では chintz（インドさらさ）、batic（ジャワさらさ）、printed cotton（ヨーロッパの銅版・プリントさらさ）等“更紗”の名で一括されているが“更紗”という名称はある意味では日本の特殊な時代背景に生まれた日本のみで通用する呼称であろう。

又、日本の染色史上で“更紗”と云えば十六世紀以降に舶載された外来の模様染及び日本に於けるその模造品を指すものである。

日本に輸入された“さらさ”は今日一般に“更紗”の字が当てられるが、江戸時代には佐羅紗・皿紗・佐羅佐・佐良左・沙羅沙・皿紗・更紗等と表記され、紗羅染（しゃむろ染）・印華布（いんかふ）・華布（かふ）とも云われた。又、金箔・金泥を施されたものは金華布・金ザラサ・金入さらさ等と呼ばれた。

（日本の美術 12 No. 175 更紗 小笠原小枝編 監修 文化庁）より

3. 日本の更紗

（1）京・堺更紗

堺更紗は長崎開港以前、室町時代末期、当時最大の貿易港堺にインド更紗を初めとして様々な染織品が運び込まれた。富裕な商工業者の合議による自治都市が生まれていた進取の気運に富んだ堺は河内木綿の生産地を控えており、それに疾うに糊防染が行われていたはずで京・堺で更紗が作られる環境は充分にあったであろう。

(2) 鍋島更紗

鍋島更紗は慶長年間（1596-1615）秀吉の朝鮮出兵帰陣の際（慶長3 1598）藩主鍋島直茂が連れ帰った高麗人の一人、医・薬に精通していたと云われる九山道清（正保四 1647没）が制作を始めたとされている。別名 道清(どうせい)更紗、又は半兵衛更紗とも云われる。鍋島藩の庇護の下で作られたもので染料、技法を図示した秘伝書なるものが伝わっている。手法は木版で墨摺を行い、次に色毎に型紙を使い刷毛で色を摺り込む。そして最後に上形と称する赤摺をする。この型摺りと木版を併用する技法は他に類例のない特別のものである。使用範囲も一般大衆向きのものではなく藩の御用達的なものであった。

(3) 長崎の更紗

長崎は出島阿蘭陀貿易の交易の場であり当然、異文化摂取が多かったことから更紗が作られる状況・条件が何処よりも整っていたであろう。明和（1764-1772）の頃、伊藤善平次の金の描き入れ更紗、文政年間（1818-1830）に御用時計師で科学者でもある上野俊之丞が創始したと云われている中島更紗がある。

それに紺屋が多く染が盛んに行われていたといわれる浜の町に「イサラ染方正傳」（長崎歴史博物館所蔵）という更紗の資料が残されている。

表紙に 「イサラサ染方正傳 さらさや祐七」
最終丁に 「型紙の御座候処 長崎東濱町 さらさや祐七
勇七 宅也」

と記されており、赤・黒・黄のせんじ様、名ばん・緑ばんにて媒染、それに飛色・紅藤・唐茶・本茶・青茶の合方が記されている。煎じた植物の染液に媒染剤を入れて沈殿させて顔料化したものを摺り込んだものと推定される。色目としては赤・黒・黄、それ等の染液と媒染の濃度変化により色相の違いの茶系ということになる。その中に「……………更紗形付を色留之方、但し形を付上て日にほしかわかして右更紗形付を米俵中に入れて夫をむし桶の中に入 線香金尺巻寸五分ともす間……………」とあるところから蒸しにより色を定着させたことが解かる。そして「型紙を三日位遺候ニ而たきる湯ニ而洗い候事 尤赤黄一所ニ而不然、黒類ハ一所ニ而足」の部分は明らかに摺り込み用の型紙の後始末法であり、この資料は和更紗の染方を探る重要な手掛りになりうる。

4. 天草伝世の更紗

さて、名のみ先行して実体が掴めないままの天草更紗とは一体如何なるものであろうか。

文政年間蘭人・外国人より伝授を受け、富岡町森伊エ門の先代某なる者及び城河原（現天草市五和町）金子為作の手により始められたもので模様は異国的なオランダ、ベルシャ風の花鳥、草花が多く、色は紅・黄・弁柄・緑・黒等が使われ、其の更紗は島内の旧家に現存、そして昭和の初めに本渡の中村初義氏が復興をなしたと多少の表現の差はあれ概してこれが通説になっているようだ。

（註1）大正14年長崎市商品陳列所からの更紗についての問い合わせに対して各町村の報告として

富岡町役場-今ハ距ル約七十余年前富岡町森伊エ門ノ先代某ナルモノ長崎ニアリテ蘭人ヨリ伝授ヲ受ケ

鬼池村役場-オヨソ百年前天草郡城河原村金子為作（本渡有馬安吉亡父ノ弟）ガ某外国人ヨリ伝授ヲウケ

本渡町役場-旧幕時代天草郡城ヶ原村ノ住人金子為作ト称スル者某外国人ヨリ伝授ヲウケ

（但シ確實ナル事不明）居村ノ自宅ニテ開業シ……………

なるものが提出されている。過去帳を調べてみると森伊エ門ノ先代某とは孫四郎（安永四 1775年 生-弘化4 1847年 没）のことであり、金子為作（文化十一 1814 生-明治十七年 没）と共に紺屋でもあったようで断定的な両者の名前は多分この報告書から出たのであろう。が、これについて確証はなく多分口伝えによったものが提出されたものと推測される。それに既に和更紗が制作されていた近距離の長崎の更紗製造者

との係わりは考えられるにしても文書に述べられている蘭人・某外国人より直接伝授を受けるということは考え難い。江戸期天草で染められ旧家に残存していると云われている更紗裂は如何様な入手経路を辿ったものなのか不明である。が、大江の旧大庄屋松浦家に集中的に存在、他の旧大庄屋家に数点、蒐集家がコレクトしたもの・其の中には夜着として完全な様を成しているものが数点あるが他はほとんど端裂である。

5. 松浦家残存の更紗

〈松浦家は江間家（江戸幕府領天草 富岡代官所 山方役）と親戚関係にあり江間家所蔵品が松浦家に伝来）
現在 夜着・座布団・裂地として在

1. 端物切本帳の中のそのもの 即ち、輸入された外来更紗

端物切本帳について

【江戸時代 オランダ船・唐船によって長崎に持ち渡られた輸入品は長崎奉行配下の諸目利によって鑑定・評価された。輸入反物に関しては反物目利と呼ばれる役人によってその職務が果たされた。反物目利は荷揚げの後荷改(積荷の品目・数量確認)の際に……反物一反ヨリ巾二寸位宛目利手本取候儀ニ付、其段申上 手本為取可申……とあるように手本として取られた巾二寸位の裂が端物切本帳に貼付けられたもので、後の覚えとして作成したものであり、大改下調べ(長崎奉行が積荷のサンプルに一通り目を通す形式の手続き)、商人見せ、荷渡し等の際に現物と照合するためであったと考えられる。】



端物切本帳（長崎歴史文化博物館蔵）

（「端物切本帳について」 石田千尋 東京国立博物館美術誌 No. 456）より

松浦家所蔵輸入更紗

(a)



(b)



(c)



- (a) 「文化年渡り品 紅毛渡来反物見本帳 参 松本記」 長崎歴史文化博物館蔵
「唐紅毛渡来反物見本帳」
- (b) 「唐紅毛渡来反物切見本帳」 長崎歴史文化博物館蔵
- (c) 「文化年渡り品 紅毛渡来反物見本帳 参 松本記」 長崎歴史文化博物館蔵
「紅毛渡反物見本帳 式 松本記」

(a)・(b)・(c)の更紗は上記見本帳の中に裂地・模様共に同一のものを見ることが出来、これ等はオランダ船舶載のヨーロッパ更紗と判断出来る。しかし見本帳の中には模様は同一で色違いのもの、同模様のものが繰り返し出て来るものがあることから年代を特定することは出来ない。

II. 裂見本帳の中に見る事が出来る輸入更紗の模様を模し、それを和更紗の手法で染めたもの

松浦家所蔵和更紗

(d)



(e)



(f)



- (d) 「唐紅毛渡来反物見本帳 壱 松本記」 長崎歴史文化博物館所蔵
- (e) 「文化年渡り品 紅毛渡来反物見本帳 参 松本記」 長崎歴史文化博物館所蔵
「紅毛渡来反物見本帳 式 松本記」
「天保年渡唐口更紗」
- (f) 「文化年渡り品 紅毛渡来反物見本帳 参 松本記」 長崎歴史文化博物館所蔵

(d)・(e)・(f)は上記見本帳の中の模様と一致するが布地が異なる。そして型紙のホシ跡（柄を連続させる場合、繋ががずれないように型紙の上と下の同位置に印を彫りそれを合わせて型紙を送っていく。送り星・合星とも云う。）を見出せることから年代は特定出来ないが輸入裂の模様を模して日本で染められた和更紗と判断出来る。

色は色相の違いだけで、ほとんど黄・茶系統が使われている。制作地・年代を特定することは出来ない。松浦家にはこれ等の外に数点の残存更紗もあるが、所蔵されている更紗裂は輸入更紗と和更紗の二種類に大体分けることが出来る。

(※1) 和更紗について

- (イ) わたりものの更紗か、和更紗か一寸見ただけでは真偽の判断しかねるものさえある渡り更紗の忠実な写しもの
- (ロ) 渡りものの更紗に刺激され、その異国的な模様を生かして各地で制作され、制作された土地の名を冠して何々更紗と呼ばれてきたものである。これ等の更紗は主として型紙を用いて裂に染料

を摺ったり、型染と同じく型紙を用いて糊を置き、その後引染したりしたもので、用途は下着・布団・風呂敷など一般の日常的な商品として量産された大衆品の二つのタイプに大体分けることが出来る。

(日本の美術12 No. 175更紗 小笠原小枝編 監修文化庁) より

(※2) 江戸時代の更紗輸入状況

| | | | | |
|-----------------------|------------|-----|-------|---------|
| 寛政期 (1789~1800) | インド更紗 | 輸入量 | 年平均 | 1500反強 |
| 享和期 (1801~1803) | インド更紗 | 輸入量 | 年平均 | 3600反強 |
| 文化期 (1804~1817) | インド更紗 | 輸入量 | 年平均 | 6000反弱 |
| 文化元年~文化四年の4年間で23670反弱 | | | | |
| 文化期半 オランダ船 数年 来航欠年 | | | | |
| 文化10年 (1813) | インド更紗 | 輸入量 | | 7872反 |
| 文化10年 | ヨーロッパ更紗の初出 | 輸入量 | 百六拾六反 | 「本国上皿紗」 |
| 文化14年 (1817) | インド更紗 | 輸入量 | | 8365反 |
| | ヨーロッパ更紗 | 輸入量 | | 541反 |

本方荷持としてヨーロッパ更紗が日本に輸入されたのはイギリス船により文化10年であるが、オランダ船によって輸入されたのは文化14年である。

| | | | |
|-----------------|----------------|-----|--------------|
| 文政期 (1818~1829) | 輸入量 | 年平均 | 103889反弱 |
| | 50784反-ヨーロッパ更紗 | | 53105反-インド更紗 |

インド更紗とヨーロッパ更紗はほぼ5対5の割合であるが、初期には圧倒的にインド更紗が多くみられたが文政5年(1822)に逆転し、後期にはヨーロッパ更紗の増加をみる。

インド更紗からヨーロッパ更紗の転換期

| | | | | |
|-----------------|---------|-----|-----|--------|
| 天保期 (1830~1843) | ヨーロッパ更紗 | 輸入量 | 年平均 | 2800反弱 |
| 弘化期 (1844~1847) | ヨーロッパ更紗 | 輸入量 | 年平均 | 2000反弱 |
| 嘉永期 (1848~1854) | ヨーロッパ更紗 | 輸入量 | 年平均 | 2000反強 |

(日蘭貿易の史的研究 石田千尋著 吉川弘文館 -オランダ船の更紗輸入-) より

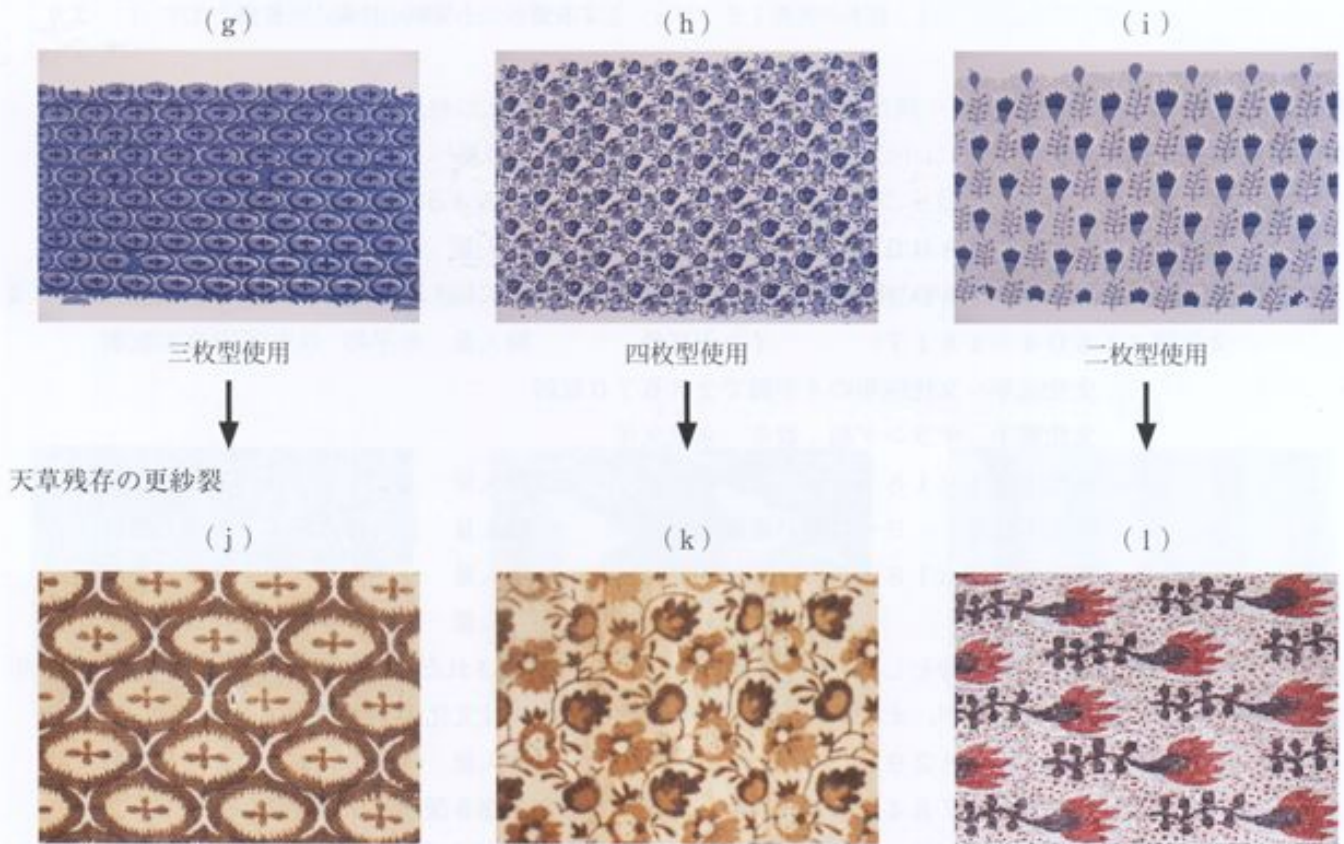
6. 型紙について

次に型紙について幕末には全国余すところなく行き渡っていた伊勢型紙の(註2)「天保五年午年ノ調白子。寺家紺屋型賣共人別名前並ニ出稼國ノ改メ帳」から天草に関する所を拾ってみると

「筑後柳川ヨリ肥後打田迄参り候一兵太郎」「肥後熊本ヨリ天草迄参り候一伊平」と記されていることから島内の紺屋で伊勢型紙が使用されていた事がわかる。しかし、天草の中で古い型紙は小紋染、中型染用のみで期待した和更紗に必要な摺り込み用の型紙は残念なことに未だ一度も目にした事がない。数年前、福岡県柳川で幕末か

ら明治半頃まで続いた紺屋に大量に残されていた型紙の中に天草の残存更紗の模様と同一で、しかも裂見本帳中の模様を模した摺り込み用の型紙が数組発見された。それを挙げてみると

柳川残存の和更紗用型紙



(j) 荅北町吉田家所蔵だった裂 和更紗 模様は見本帳を模したもののか、国内でデザインされたものか不明

(k) 本渡町尾上家所蔵だった裂 和更紗
 紅毛渡来反物見本帳 式 松本記 (長崎歴史文化博物館所蔵) の見本帳の中の模様と一致
 裂地が異なり見本帳の模様を模した和更紗

(l) 富岡町武田家所蔵のヨーロッパ更紗

(j)・(k) の更紗裂は柳川で染められたものが天草に流入したものか、他の地と同一模様の型紙が使用され天草で染められたものか、或いは天草・柳川以外の他の地で染められたものが天草に流入したかの何れかであり、幕末・明治時代のもものと推定される。(l) は見本帳の模様を模した型紙を使用して柳川で和更紗が制作されたものと推定される。型紙は普通、特注でない限り同柄で同時に数組彫られることもあることからして数箇所の地で同じ柄の型紙が使用されということは有り得る。

7. 武田家所蔵の更紗

天草郡富岡町の故武田 武氏により蒐集された更紗裂が在る。夜着に仕立てられたものが三点、切裂地が三点、幕末か明治初めのものと思われるヨーロッパ更紗48枚を貼り付けた見本帳もある。入手経路は不明。

武田家所蔵輸入更紗

(m)



(n)



(o)



(p)



(l)



(q)



- (m) 文政十二年丑八月 丑紅毛船持渡反物切本帳（東京国立博物館蔵）と一致
オランダ船舶載のヨーロッパ更紗と判断
縦20×横19（cm）の版 使用
- (n) 文政十二年巳八月 紅毛船持渡反物切本帳（東京国立博物館蔵）と一致
オランダ船舶載のインド更紗と判断
縦5×横9（cm）の版 使用
- (o) (ロ)に近い年代の輸入更紗と推定
縦8×横7（cm）の版 使用
- (p) 巳紅毛船持渡奥嶋類切本帳（東京国立博物館蔵）と一致
天保期以降のオランダ船舶載のヨーロッパ更紗と判断
- (l) 天保二年卯八月 紅毛持渡奥嶋・更紗類切本帳（東京国立博物館蔵）と一致
オランダ船舶載のヨーロッパ更紗と判断
この更紗の模様を模した型紙が江戸期 柳川の紺屋に残存
- (q) 文化年渡り品 紅毛渡来反物見本帳 参 松本記
天保年渡唐口更紗（長崎歴史文化博物館蔵）と一致
オランダ船舶載 又は唐船舶載のヨーロッパ更紗と判断

但し、例年多量の更紗が輸入されており、他の見本帳に繰り返し同模様のあることからいずれも年代を特定することは出来ない。

8. 『天草の更紗』の考察

天草更紗の存在を証明する具体的な資料は皆無に等しい。石本家（幕府領天草御領の特権御用商人・豪商）文

書の中に紺屋清十（文化八年）、紺屋富太郎（十四年）、紺屋庄兵衛（江戸期）等紺屋名を知ることが出来る。幕末・明治時代には島内に有馬大黒屋・規矩屋・唐津屋・住吉屋・松屋等の紺屋があり和更紗が全国的に広がっていたことを考えると天草でも早くて幕末から明治時代に大衆的な更紗が染められたとしても流れとしては考え得ることである。

（註3）明治二七年に「第四回内国博覧会出品スベキ物品氏名別紙之通ニ付及御通知候也」と富岡町長名にて郡役所に出品表なるものが提出されている。部類・品目・数量・出品人に分かれおり、部類として食品・糊料・肥料・織物・標本となっている。其中に

| 部類 | 品目 | 数量 | 出品人 |
|----|-----------|----|-----|
| 織物 | 天草 刷花布 | 1反 | 森 茂 |

とある。印花布とあるところから多分更紗模様を藍一色で型染したものと推測される。

出処は不明であるが武田家蒐集品の中に明治以降の写本と推定される「日本第一天草晒紗傳」「西京傳染法」「下痢の薬」「小児風邪ノ薬」「嘔吐ノ薬」が記された和紙を綴じたものがある。この「日本第一天草晒紗傳」は植物染料の合方を記したものである。其中に「コンジョウ ヲ アラビアシヤコン ニテ解く」とあるが、コンジョウ（紺青）とは化学合成された顔料であり、それを化学薬品で溶くということである。このコンジョウと合わせてモエギ・水色・浅黄コンジョウを作るということは色相・色数からみて島内での更紗制作の遅い時期のものとして推測される。天草更紗の資料として「天草更紗伝」なるものが流布されているが、これは、この「日本第一天草晒紗傳」を写し、コピーされたものである。天草の更紗を考察する上で貴重ではあるが江戸期の天草の更紗の染料合方の基とは考え難い。

幕末・明治・大正期を通して全国的に製作されていた模造の和更紗は近世著しく発展した友禪染・小紋・中型等に比して次第に停滞していった。色々な要素が原因として考えられるが、和更紗はあくまで輸入の更紗の模造であり、作業過程では時間を要し、色の退色度の問題、技法上での難、それに日本は更紗に使われた綿よりも絹を偏重する国民性であり、量的にも輸入品で需要は充分満たされていた事等々が考えられる。明治の末に、天草の更紗が何も幻の如く消え去ったのではなく全国的な和更紗衰退の渦中での自然の成り行きであったであろう。

明治三年に初めてドイツから京都に化学染料が輸入された。実用化するまでには年数を要したが、明治の半頃には糊に染料を混ぜた色糊を生地に置き、蒸しにより色を定着させる写糊（うつしのり）の発現をもたらした。そして、型染技法にこの写糊を併用することにより型友禪と云われる技法が生まれた。これは、染の加工工程を簡略化し安価な大量生産を可能にして工業化に繋がっていったのである。

昭和の初めに本渡で更紗復興として脚光を浴びた「天草更紗」と称されたものは、この技法、即ち色糊を使用した型染である。模様は染屋のオリジナルのものであろうか？

更紗とは如何なるものなのか、定義づけることは中々難しい。唯、インド、ジャワ、ヨーロッパ、日本の更紗には各々の技法がある。その技法でもって更紗の模様が染め付けられたものである。例え更紗の模様であっても技法が伴わなければ厳密な意味で、更紗ではなく「更紗模様」「更紗風」と表現して然るべきものとする。 「天草更紗」と呼ばれるようになったのもこの頃であろうが、天草と云う土地の名を冠して「天草更紗」という名称を商標的に使う事は自在であるが、制作者の熱いおもいは別にして復興・復活という言葉でもって江戸期の

更紗との関連を位置付ける様な印象を与える解釈がなされてきたのではなかろうか。

9. おわりに

島内では輸入更紗であれ、本邦製更紗であれ、更紗裂があれば全て天草で制作された「天草更紗」になってしまっていたところが多分にある。幾度も述べてきたように幕末に輸入更紗の模造から始まった本邦製の更紗は地域的に時間の差はあったにしても全国的に広がっていたという背景がある。長崎とは隣接しており、時流に乗って天草でも更紗が染められた事は充分考えられる。が、しかし鍋島更紗のように他に類のない“これぞ天草更紗なり”といえる独自性のある残存更紗裂が全く見当たらず、更紗の中で特別のものと見做すには無理がある。

天草という島と異国情緒豊かな更紗のイメージがマッチして残存の更紗裂の検証がきちっと為されないままに、膨らみ解釈されてしまったところに天草更紗と云われるものの実体の曖昧さに繋がってしまったのではなかろうか？

更紗は江戸期の或る一定の時期に外来貿易によって齎された染織品として、古渡更紗と称される更紗とは違って、たとえ高い評価をなされなかったものであったとしても歴史的に大変意義のあるものである。このことからして天草の旧家に残存している江戸時代の輸入更紗・和更紗の数々、蒐集家により集められた更紗の数々は、仮に他所で制作されたとしても稀少で価値あるものである。これ等の更紗裂が如何様に保存、継承されていくのが今後天草に残された大きな課題ではなかろうか？

【参考文献 及び 資料】

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 平田正範 | 蒐集資料より (註1) (註2) (註3) |
| 北村哲郎 | 『染織と生活 No.3』 染織と生活社 1973年 |
| 鈴木照次 | 『染織と生活 No.3』 染織と生活社 1973年 |
| 越中哲也 | 『染織と生活 No.3』 染織と生活社 1973年 |
| 吉岡常雄 | 『染織と生活 No.3』 染織と生活社 1973年 |
| 上野一郎 | 『染織と生活 No.5』 染織と生活社 1975年 |
| 小川三樹 | 『阿蘭陀更紗』 芸艸社 1927年 |
| 越中哲也 | 『染織の文化』 朝日新聞社 1985年 |
| 石田千尋 | 『古渡り更紗と和更紗』 根津美術館 1993年 |
| 石田千尋 | 『鎖国・長崎貿易の華』 神戸市立博物館 1994年 |
| 勝盛典子 | 『鎖国・長崎貿易の華』 神戸市立博物館 1994年 |
| 小笠原小枝 | 『日本の美術 12 No.175』 至文堂 1980年 |
| 小笠原小枝 | 『MUSEUM No.456』 東京国立博物館 1989年 |
| 石田千尋 | 『MUSEUM No.456』 東京国立博物館 1989年 |
| 近藤道子 | 『近世更紗の受容と変容』 神戸女学院大学院文学研究科修士論文 2003年 |
| 近藤道子 | 『文化論輯 13号』 神戸女学院大学大学院比較文化学専攻学友会 2004年 |
| 石田千尋 | 『日蘭貿易の史的研究』 吉川弘文館 2004年 |
| 小笠原小枝 | 『こわたりさらさ』 五島美術館 2008年 |
| 石田千尋 | 『こわたりさらさ』 五島美術館 2008年 |
| 逸翁美術館 | 『数寄者の愛した更紗』 1995年 |

京都国立博物館 「染の型紙」 1968年

江崎栄一 「染型紙」 個人書店 2004年

本稿の作成に際し、多大のご協力・ご教示を頂きました

東京国立博物館・九州国立博物館・長崎歴史文化博物館・天草切支丹館

松浦家・武田家・木山家

石田千尋氏・勝盛典子氏・近藤道子氏・竹本義信氏に深く感謝し、ここから厚く御礼申し上げます。

天草更紗の検証

発行年月日 平成22年9月30日

編集・発行 大和田 靖子

印刷 弘栄印刷株式会社
